

## 連載第3回

Between Cinema  
& Geology

by ロッキー鈴木

前号で「千と千尋の神隠し」が宮崎駿作品の中では特に傑作とするに足りない、と書いたら、なんとベルリン映画祭の金熊賞をとってしまいました。恐るべし、スタジオ・ジブリ。この快挙には素直に拍手、です。

特に、記者会見での宮崎監督の日本アニメへの厳しい批判（エロとバイオレンスに対しての）には、本物のパイオニア精神が溢れており、映画として鑑賞に耐える質の高い作品を生み出してきた宮崎氏の日本アニメへの苦言は、美少女と戦闘ロボットの物語が国際的に市民権を得た、と単純に喜んでいたオタクな人々に、強烈なしっぺ返しとなっていました。

アニメだけど、あるいはアニメだから、ではなく、同年度に生まれた「ハリー・ポッター」におとらぬ、優れたファンタジー映画として受賞した「千と千尋」なのです。これくらい褒めておくと、前回批判したことのフォローになっているのではないのでしょうか。

さて、金熊賞の次の話題は、やっぱりオスカー。本年度のアカデミー賞は、主演男女賞がともに黒人、ということが大きな話題でした。そしてアフリカ系として初の主演男優賞に輝いたデンゼル・ワシントンが、同時に功労賞を受けた先駆者シドニー・ポワチエにかけた「あなたの後を追ってきました」という言葉が、大きな感動とともに伝えられました。

このドラマの裏には、アメリカ社会のイメージリーダーとしてのハリウッドの襖悩に満ちた歩みがあります。そしてこ

のドラマは、アメリカ社会のあらゆる分野に台頭するアフリカン・パワーをスクリーン上ではいびつに表現し、世界に冠たるWASP（ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント）の文化、と内心は信じ続けてきたハリウッド映画人の贖罪が表現されているのです。

いうまでもなくポワチエは「チップス先生さようなら」で注目され、「夜の大捜査線（この日本版タイトルほど内容にそぐわないものも珍しい）」で押しも長押されもせぬ大スターになった、往年の名優です。この2作や、トニー・カーチスと共演した「手錠のままの脱獄」は、真摯に生きようともがく主人公が理不尽な差別に苦しめられる様が、生々しく描きこまれていました。

しかし、その後ポワチエは、あまりにも不自然な路線変更をします。つまり、「ポワチエ一発逆転」といったような、毒のない、ということは薬にもならない、たわいのないコメディ路線を走るのです。大スターの余裕のなせるワザ、ともいえますが、少なくとも日本人から見た場合、このシリーズには致命的な欠点がありました。つまり、全然面白くない、という欠点が。

これが、アメリカでは大受けした、といいます。笑いの感覚が違うって？いや、同時期のアメリカのコメディには、今見ても爆笑するしかない映画がたくさんあります（例えほかのトニー・カーチスがジャック・レモンと作った映画を見て笑えない人は、一度医者に診てもらった

方がいい、とか)。

多分、憶測ですが、「チップス先生」や「手錠のままの脱獄」を観た白人たちは、感動すると同時に、云いようのない居心地の悪さを感じたことでしょう。身体全体で黒人の身の上起きた不条理を表現するポワチエ。WASPの罪悪感を刺激しないでおくには、上手すぎるポワチエの演技。ねえ 君、生真面目すぎるのも疲れるよ。ここらでちょっと、肩の力を抜いてみないかい、かくして慣れぬコメディアン稼業に身をやつすポワチエ。そして一度抜いた肩の力は、二度と戻ることにはなかったのです。

毒を抜かれて白人たちの人気もの一人となったシドニー・ポワチエ。そういえば、彼の容姿は、どちらかといえば白人的基準での美男子です。もちろん、整形によってことさらに自分を白人化していくマイケル・ジャクソンのような異質な白人コンプレックスがポワチエにあるわけではありません。しかし、俳優である以上、容姿の問題は重要です。

ポワチエ以降、ハリウッドの映画には黒人対策の不分律があった、と邪推してみましよう。

その1、各映画会社は最低一人、黒人の主演俳優を擁する（B級で可）。

その2、社会的に注目度の高い映画の場合、重要な役に最低一人の黒人を起用する。

その1の例は、最近ではなんといってもウエズリー・スナインです。黒い大根と呼びたくなるこの俳優（失礼）、日本ではまったく人気がないのに毎年のように主演作が公開されるのは、なにか政治的意図でもあるのか、といぶかりたくなります。

その2の例は、枚挙にいとまがない。話の途中で唐突に主人公のグループに加

わる黒人（「ゴーストバスターズ」「スターウォーズ」など）の場合、暗に黒人を攻撃する映画、と捉えられるのを防ぐため、黒人を無理に参加させている、と考えられます。このような場合、多くは白人に好かれるタイプの顔の俳優が選ばれています。

さいきん、こうした事情が違ってきたのは、一つには黒人の大スターが、過去にはない数、ハリウッドで活躍している、ということがあります。デンゼル・ワシントン。モーガン・フリーマン。ウィル・スミス。サミュエル・L・ジャクソン。ウービー・ゴールドバーグ。

実力の差がよりはっきりする、例えばスポーツの世界に目を向ければ、モハメド・アリ、カール・ルイス、マイケル・ジョーダンなどの超スーパースターを輩出してきたアフリカ系アメリカ人たち。彼等に四敵する黒人スターは、過去ハリウッドには存在しませんでした。

しかし今ハリウッドを席卷する彼等は、それこそ「黒人だけ」「黒人だから」出演しているのではなく、それぞれが魅力的な個性を持つ俳優として活躍しています。「顔」についても、立派なアフリカ顔であることは、先の顔触れを観ればわかります。

9. 11の報道で、白人と黒人の女性が抱きあって泣いている強烈だけど印象的な写真が世界を駆け巡りました。一方では、ロス暴動などに見られる差別の実態があるにしても、確実に人種差別を乗り越えてきたアメリカ社会です。裏返せばかなり保守的なハリウッドが、ようやく一歩、実社会に近づいた、と評価すべきことなのでしょう。

